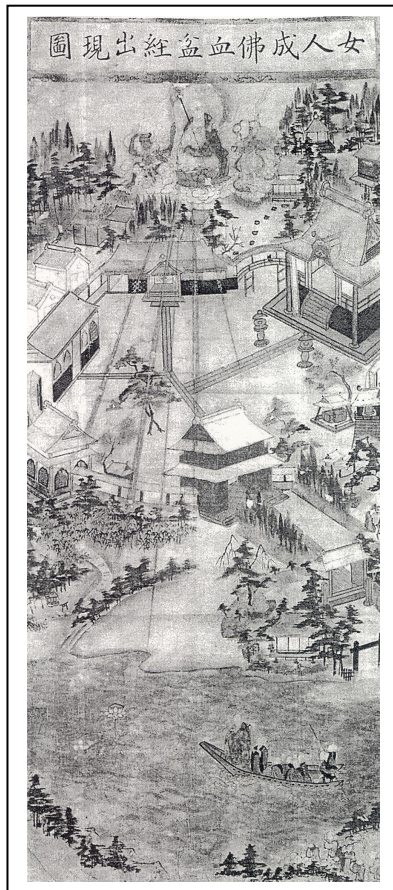


## 第四章 歴史を刻んだ湖北(1)、(2)

と“かまくら道”(3)

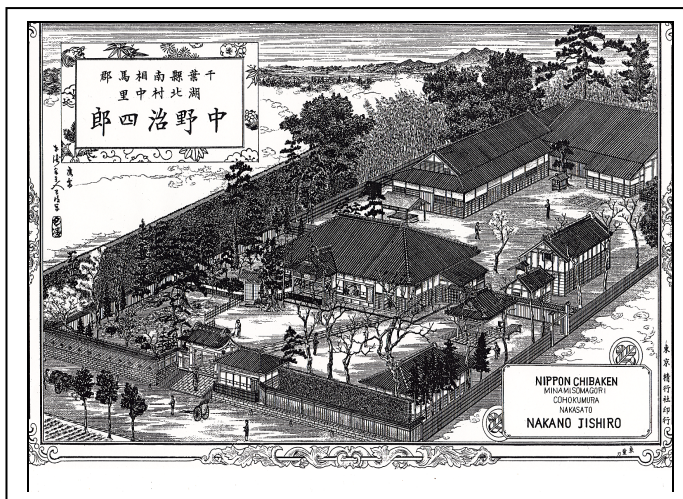


県指定有形民族文化財

正泉寺の女人成仏血盆経出現図\*1

鎌倉時代 弘長3年(1263)に見る

手賀沼の画

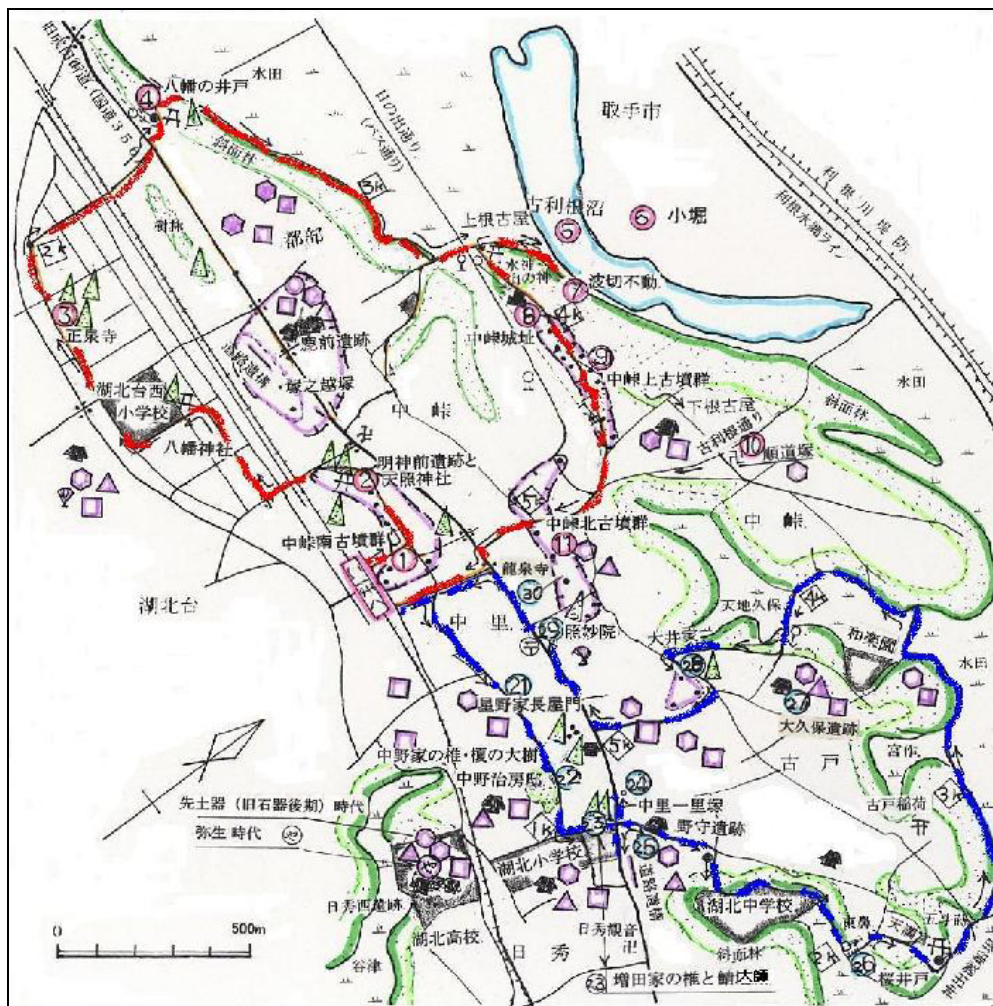


中野治四郎邸屋敷

明治27年;1894

\*2

案内図 (1) 湖北・古利根; 5.5km (2) 中里・古戸; 6km



注 ; 中峠城址麓の”日の通り”まで湖北駅北口から坂東バスの便あり。

景観スケッチ13題



正泉寺の今様





岡発戸八幡



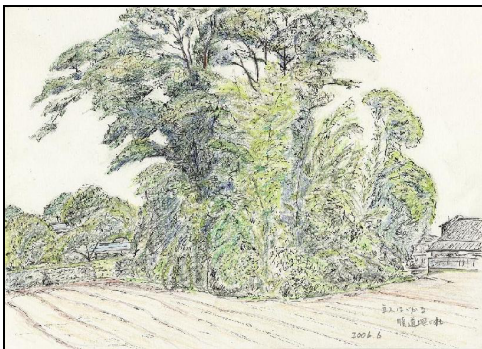
八幡神社裏山の岡発戸斜面林



上根古屋の水神・山の神



古利根沼 高橋正美絵

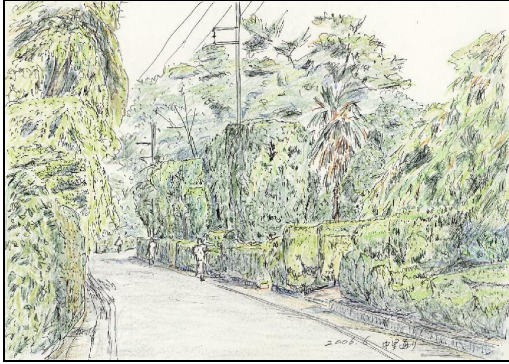


立入はばかり順道塚杜



現中野治房邸





中野邸付近の中里道



中里一里塚

古戸の村風景 高橋正美スケッチ4題



“ラビリンス” 東鼻坂上の五本路



古戸稲荷



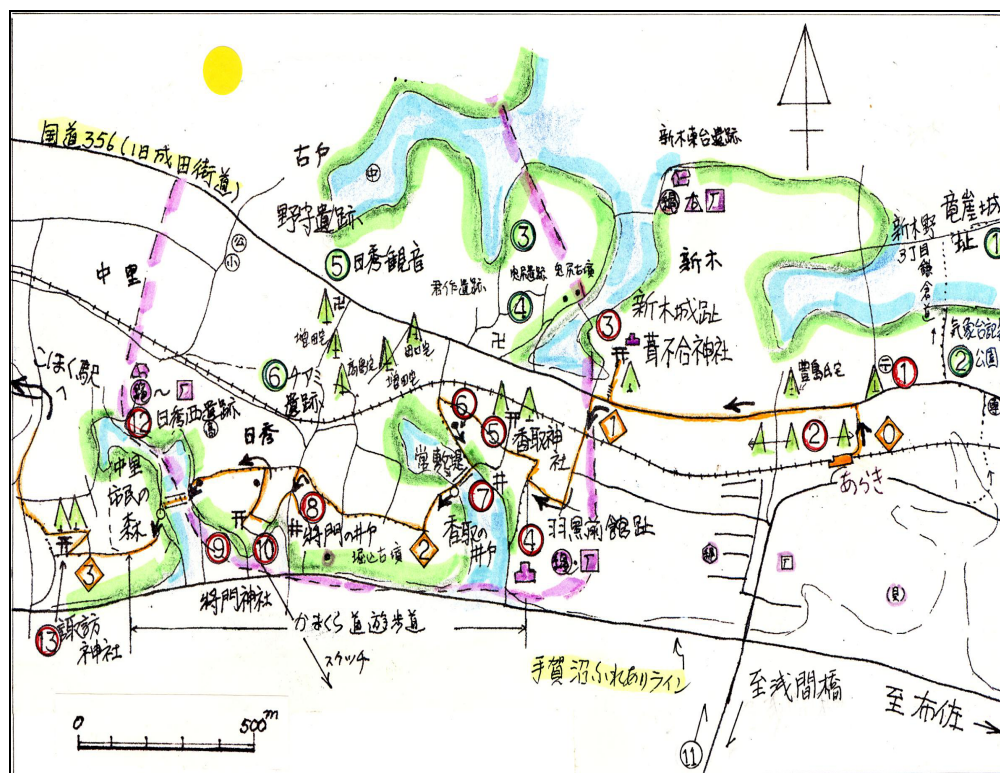
五斗蒔の春



大久保の坂“タイムトンネル”



案内図 (3) “かまくら道“(新木～湖北駅間) ; 約4km



景観スケッチ 10題



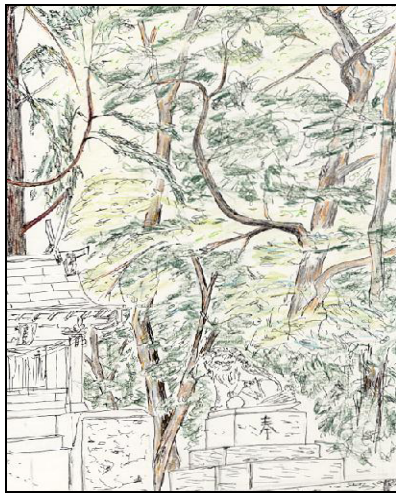
田村宅氏神様の御神木



葺不合神社本殿の壁面木彫



“天の石屋戸”の木彫； 鶏、庶民、天狗が見守る中で天宇受売命が舞っている様を、天照大神が岩戸から覗いたところを、天手力男が力一杯岩戸を開いた。 (右) 神武天皇が従者を引き連れて、山河を越えて進む東征の木彫。  
 写真では木彫の陰影が表現出来ぬため輪郭はペンでなぞった絵



香取神社



“かまくら道”沿いの“森の家”

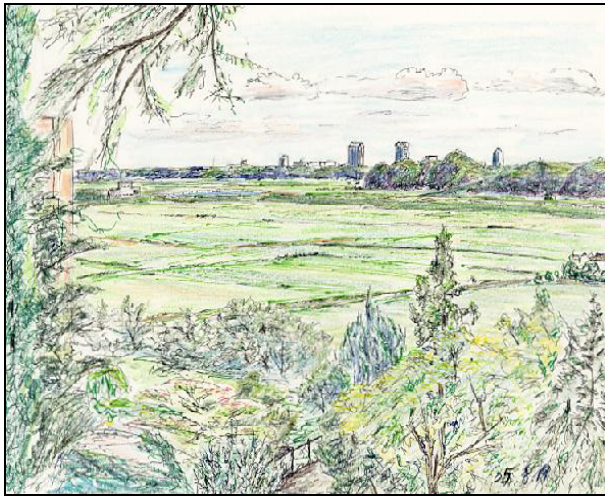


香取の井戸



将門の井戸





日秀宮前古墳のあった丘からの風景、  
沼であった頃の「鷺湖落雁」を想う



千間堤道からの新木



新木 田口邸の高生垣 高橋正美絵

## 第一節 歴史景観

### (1) 湖北

明神前遺跡は歴史時代の土師器と中近世陶磁器の破片散布地で、近接する天照神社は日本武尊東征を伝える古社です。中峠南古墳群には、太刀装具が出土することもあわせて、周辺地域が古代我孫子の中心的な環境にあったのではと考えるものです。

日秀西遺跡<sup>ひびり</sup>、鹿島前遺跡をはじめ、野守、大久保、チアミの遺跡といった古墳時代後半からの古代遺跡の地に、官人の居住跡地が多く集中しています。この地域が古墳時代後半以降に相馬郡の中心地「郡衙」<sup>ぐんが</sup>があったことを示すものです。天平宝字六年(763)の正倉院文書によれば、当時の相馬郡は、現在の柏、野田、取手、守谷、利根、水海道に跨る地域です。

古代には豪族に支配される「部」という人たちが居ました。「久須波良部」はもともと「藤原部」でしたが、奈良東大寺正倉院に残る我孫子周辺の戸籍(正倉院文書(72))には多くの藤原部が記付されましたが、後に藤原氏が政治の中心で活躍するようになってからは、庶民の藤原部は「久須波良部」に改性されました。このことは郡衙の東部に当る新木東台遺跡、羽黒前、西大作の各遺跡から人名の入った墨書土器の出土で明らかになりました。

郡衙東側の手賀沼、香取海側には久須波良部氏が居住して居たと考えられます。彼等の羽黒前遺跡は奈良・平安時代、市内で最大規模の集落で、後に館

も造られています。ここで水上路を監視していたものと考えられます。

中峠城址周辺には、戦国武士達の城下集落であったと伝えられる上根古屋、下根古屋の集落があります。下根古屋の東外れには順道塚の森がありますが、中峠城の落城の悲話をその森の中に秘めています。

中峠・古戸の入り組んだ谷津から登る坂道は沢山ありますが、それぞれ自然が創る景観を見せてくれ名残多い坂路です。林の中の「タイム トンネル」もあり、くぐり抜ける楽しみは、もう一度登ろうと結局三回も上り下りしてしまう様な遊びのできる散歩道です。

古戸の「はけの道」は人通りが少なく、寂しさがありません。五斗蒔の一軒農家は安心させてくれる長閑な風景です。このような風景は探しても中々見つからないのではないでしょうか。

深山治他<sup>(\*)</sup>の文章(3)にこんな風景描写があります。『高台から谷間にかけての樹林の下、侵食された地層の間からしみ湧き出す地下水によって、谷間には水が絶えず流れ落ちてくる。その水を稲代や田に用いたのが谷津田であり、…』

### (2) 「かまくら道」

「かまくら道」の信憑性は薄いようですが、「利根川・手賀沼と湖北」\*4によると、『湖北手賀沼側を這う「かまくら道」は、廉平年間(1058～1064)八幡太郎義家が奥州征伐の折通過した旧道であるといわれます。そして井戸に



近い所、八幡宮、諏訪、氷川、熊野神社、禅宗、日蓮宗などの社寺の近くを通り、隠密行動のできるように工夫されている。』

鎌倉街道は、治承四年(1134)源頼朝が鎌倉に本拠を置き中央集権のために着手した街道です。国史大辞典によると『鎌倉街道は、太平記に記される上ノ道(武蔵路)、中ノ道、下ノ道がある。下ノ道は下総、上総に通じる』とあります。鎌倉街道の名称は江戸時代に「鎌倉街道」、「鎌倉海道」と呼ばれましたが、それ以前は「吾妻鏡」などの言う「鎌倉往還」が古く正しい呼び名と考えられます。鎌倉街道は元弘三年(1133)義貞鎌倉攻めの援軍として千葉貞胤軍が南下した進路で、鎌倉幕府開設以来、地頭が献納その他で鎌倉を往復するために使われました。室町時代に入ると將軍の統率力は衰退し、駅制は事実上消滅しました。その結果、各地の豪族は思うがまま関所を設けて関銭を徴収するようになりましたが、戦国時代応仁の乱後、官道は退廃しました。

## 第二節 名所解説

### (1) 湖北・古利根

#### ① 中峠南古墳群

円墳10基、勾玉、ガラス小玉、直刀が出土したほか、周辺から須恵器、土師器も出土しています。1号墳からは古墳時代後期の土器と金銅製の太刀装具も出土しています。古社・天照神社との関連性が深いと見られます。

#### ② 明神前遺跡 と 天照神社

明神前遺跡は歴史時代の土師器、中近世の陶磁器を出土します。天照神社は日本武尊東征遺跡を伝える古社で中相馬七ヶ村の総鎮守でもあります。その様な事からこの地は古来祭祀の場所であったと推察されます。境内にある椎(スタジイ)、銀杏は市指定の保全樹木です。

#### ③ 正泉寺(本章表紙絵参照)

正泉寺は、鎌倉時代、弘長三年(1263)開基の寺で、血盆経発祥の地とされます。血盆経は出産・月経などを経験する女性は死後成仏できないで血の池地獄で苦しむが、血盆経は女性を救済できると説きました。当寺の信仰資料の女人成仏血盆経出現図と版木類は県指定の文化財になっています。

松(2)、銀杏(1)、今桜(2)、椎(2)、アカガシ(2)、ユキノキ(1)、樟(1)、杉(13)は保全樹木で、一軒当りの保全樹木数は市最多数の二十四本です。

#### ④ 八幡の井戸(景観スケッチ参照)

「中相馬七ヶ村(湖北)の七つ井戸」の一つ。大日井戸と呼ばれ、正月には、これら七つの井戸から若水が汲まれました。七つ井戸は他に、下新木葺合神社の 弁天の井戸、上新木の 香取の井戸、日秀の 将門の井戸、中峠の 桜井戸、湖北台八幡神社南の 元日の井戸、湖北台東小学校の 井戸坂の井戸があります。元日の井戸、井戸坂の井戸は道路下になり、多くは埋没したり

して使われていませんが、唯一八幡の井戸が、ポンプ小屋を造って利用されています。

⑤ 古利根沼（景観スケッチ参照）

年間を通じて生息する鳥は、コジユケイ、カワセミ、ヒバリ、セグロセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ウグイス、ホオジロ、カワラヒワ、オナガ、ハシボソガラスなどです。冬の鳥類ではコガモ、ホシハジロ、アカハラ、ツグミ、オオバン等、春にみられる鳥はムナグロ、イソシギ、カイツブリ、コアジサシ、キジ等です。

また秋には『寒天状の塊が浮き上がる現象があります。これはオオマリコケムシというコケムシの仲間の群体です。1ミリ程度程度の固体が集まったもので、その固体は触手があり、水流を起してプランクトンを獲って食べています』（\*5）。

昔の利根川は、J R利根川鉄橋下流から大きく蛇行して中峠の上根古屋の台地を直撃し、増水時には甚大な水害をもたらしました。そのため明治三十三年から二十年に亘る水害対策の直流水工事が行われ、そのため湾曲部が取り残されて、大正九年（1920）に現古利根沼は誕生しました。

かつて江戸、明治時代の利根川は、江戸を支える物流の中心ルートでしたので、白帆のたなびく高瀬船や外輪蒸気船が毎日何百艘と往来しました。こうした由緒ある沼の自然を大切に守る「古利根と古利根の自然を守る会」が平成十二年に 第四回景観賞を受けました。

⑥ 小堀 おほぼり

古利根沼の対岸に小堀集落があります。ここは対岸が絶壁の上に森もあり風を防ぐため、往来する高瀬船にとって格好の休息地でした。そのため風待ち、増水待ちの停泊地、人足の補給、荷分けして輸送する「はしけ船」の基地となりました。順調な時は銚子から丁度一日でたどり着く位置にあり、翌朝ここを出て夕刻 関宿に着くと、翌日は江戸川を下って江戸の運河に入ることが出来ました。

そのほか当時は舶来技術品であるレンガは、ここで造られていました。中野治房邸屋敷堀のレンガ、井上二郎が利根川沿いで建設した水門レンガは、ここで造られたものです。

⑦ 波切不動尊（波除不動とも言う）

不動様は古利根沼の南岸に、コンクリートで土留されて崖中腹にあります。石碑には、この不動尊は、平安の弘仁年間に弘法大師が手賀沼の草庵で刻み、朝夕に礼拝したとあります。江戸初期の寛永七年（1630）頃、流路変更された利根川は、洪水時に其れまで以上に水嵩が増し、城山の断崖は出水の度に崩壊しました。このご本尊を安置したところ、周りは崩壊を続けましたがご本尊の鎮座した所だけは残りました。二百四十年後の今日も、いかなる激流にも崩壊しないといわれています。これはご本尊の加護によるものと、以来波除不動尊と名付けられました。昭和五年の建立です。



⑧ 中峠城跡 (古くは芝原城址 付図・4参照)

市内最大の中世城郭です。崩壊して見分けし難くなった空堀、土塁、腰曲輪などで区切られたⅠ、Ⅱ、Ⅲ郭があります。本丸は西突端部のⅠ郭にあつたと伝えられます。Ⅱ(一の丸)、Ⅲ(三の丸)郭遺構の南半部は、近年の宅地化で失われました。土豪芝原某の築城と伝えられます。法岩院の梵鐘銘文や享禄五年(1533)〜天正十七年(1589)間の記録には、千葉末裔河村出羽守勝融公の名があることから、その頃に居城し、中峠城と呼んだと考えられます。小田原城北条家の家臣河村氏は(別の記録では河村氏は古河公方家臣の河村氏と同族)、常陸佐竹氏との戦いの前線にありましたが、豊臣・徳川勢の関東進出で制覇され、天正十四年(1586)に討死したとあります。

⑨ 中峠上古墳群

七世紀前半の古墳群で、円墳10基があります。

⑩ 順道塚 (景観スケッチ参照)

中峠城落城に伴う悲話が残されています。北条氏が豊臣により滅亡された時、中峠城代の林伊賀守(後剃髪して順道と言う)は、主君妻子の先途を見届けて従士三十二人と共に自刃しました。塚の上には石塔が建っています。四代將軍徳川家綱時代の建立ですが、施主は不明。この塚の所有者

で、長年塚を守ってきた川村家は、元河村氏の臣・林氏と伝えられており、塚に埋もれていた素焼きの五輪塔を保存しています。また村誌によると家臣の川村氏は“担い塚”に寛永三年水神宮石祠(ほじ)を建て沼に沈んだ武士達の霊を慰めたとあります。中峠城の落城に関わる伝説は悲惨です。

⑪ 中峠北古墳群

七世紀前半の古墳群で、円墳8基、横穴式石室と石棺が出土しています。

(2) 中里・古戸

2① 星野家長屋門

星野家は江戸時代初期からの旧家。長屋門は、地位ある家の象徴で明治三十年頃作られたと言われます。関東大震災で屋根瓦が破損したため葺き直し、漆喰止め、壁は漆喰で固めたナマコ壁です。現在は門両脇を店舗に改築していますが、本来は倉庫と家屋として使われていました。

2② 中野家の椎(景観スケッチ参照)

中野勝馬氏の屋敷は大谷石の大きな塀に囲まれているが、門入口左側に幹周り3.3メートルの椎の大樹があります。昔から酒屋新宅の椎と呼ばれて親しまれた大樹です。この椎の木のほか、榎(かへ)が保全樹林に指定されています。中野家は治右衛門あるいは酒屋と称され農業と酒造業を営む豪農で江戸時代、代々旗

本内藤領の名主を務めました。中野家は幕末に火災にあっています。明治二十七年日本博覧図に銅版画で描かれた家は火災後の新邸で、景観スケッチ「現中野治房邸」の赤レンガ塀と、がっちりした四足門はその当時のものです。

中野治房は植物学者、手賀沼の水藻の研究で理学博士となり、東京帝大教授、湖北村村長の要職につき、若者の教育にも尽力しました。そして酒造所の一棟を小学校の建設に使用しました。景観スケッチには書齋と右手の書蔵があります。博覧図当時の屋敷は、馬止めの玄関を書齋に改造し、門右手には大学退官後に書蔵を造ったそうです。野口英世を後見し、東京歯科大の創設者である血脇守之助も寄宿したことがあります。

## 2③ 鯖大師と増田邸の椎

鯖大師は弘法さんが右手に大きな鯖を手を下げて立っている像である。弘法大師が巡錫中に、塩鯖を積んだ馬が通りかかったので、その潮鯖を乞いましたが、馬方は惜しんで与えませんでした。そのため報いを受け馬は病気に罹ったという話。このサバは魚ではなく、生飯さばであるとする説もあります。柴崎の円福寺にも鯖大師があります。

鯖大師の向いの椎は、枝木が道路に張り出しています。“片町四郎兵衛宅の椎”と呼ばれて愛され続けてきた保全樹木です。宅地南には椿の垣根があります。その椿の垣根沿いの小道に入ると屋敷を囲む大樹林に圧倒されます。

## 2④ 中里一里塚（景観スケッチ参照）

バス停「湖北支所前」の脇にあります。東我孫子の向原一里塚と共に市内で現存するただ二つの一里塚です。中里の一里塚は現在庚申等ほかの信仰の建物が集まっていますが、東我孫子の向原一里塚は元来の姿で残されて居ます。

全国主要街道の一里塚は、道路工事の拡幅で何処も消失しました。都内では、国指定史跡となっている北区西原と板橋区志村だけ、千葉県では殆ど知られていないようです。我孫子の一里塚も国指定史跡の申し出をしたいものです。

## 2⑤ 野守遺跡（付図・4参照）

縄文・歴史包含地です。最近の発掘調査結果によると、本遺跡は古墳末・奈良〜平安の大型堅穴建物が集中しており、畿内の土師や須恵器が出土しています。当時の役人が身につけた帯金具も出土している事から当時の郡役所（日秀西遺跡）で働く郡司の建屋であったと考えられます。道路遺構もあります。また相馬郡家付近は平安時代には常陸国に向かう東海道が通過していたと考えられますが、墨書き土器の出土は、「相馬郡於賦郷」、「於賦駅」がこの地にあつたと考える材料の一つです。

## 2⑥ 桜井戸と東鼻（高橋スケッチ四題参照）

湖北七つ井戸の一つ。現在はコンクリート管で保護された丸井戸になっていますが、しめ縄が張られて保存されています。東鼻の集落は、古くは城のあつた

という言伝えのあるところでは、迷路のような路が残っています。

## 21⑦ 大久保遺跡

縄文前〜中期、古墳〜奈良時代の住居跡十六軒があります。八〜九世紀下級官人の銅製帯金具も出土します。

## 21⑧ 大井邸の椿生垣と椎

大井邸の生垣は、樹齢は百六十年を越える高さ1.9<sup>メートル</sup>、幅1<sup>メートル</sup>の山茶花と椿の生垣です。門入り口左にある二本の椎古木は、幹周り2.5〜3<sup>メートル</sup>、樹高9<sup>メートル</sup>を越える保全樹木です。

## 21⑨ 照妙院

道沿いのムクロジは、幹周り約2<sup>メートル</sup>もある大木です。中国が原産地の落葉高木で、本州の中部・南部、四国、九州の山地に分布します。径2センチ程の種子は正月の羽根突き用羽根玉に使われていました。

## 21⑩ 竜泉寺

弘法大師の開いた寺院と言われる古いお寺です。将門の乱で消失し、また度重なる火災を受けております。明治二十二年(1889)には湖北小学校の前身、湖北尋常小学校が当院に開設され、湖北村の中心的存在でありました。

(その他)

## \* 七ツ塚・十三塚

中峠中里には七ツ塚があります。星野家裏の塚は氏神稻荷が祀られています。星野家の伝えでは中里を開発した七軒の氏神を祀った塚といわれ、中峠の十三塚も芝原村を開発した十三軒の旧跡です。

## \* 鹿島前遺跡 と 塚之越塚 (付図・4参照)

鹿島前遺跡は成田街道沿い中峠台の一角にあり、旧石器時代後期の先石器後期旧石器時代包含地、縄文・古代・歴史集落跡が含まれています。

十二世紀相馬御厨寄進文書の南限を示す表現に、我孫子の台地を貫く道路があります。この道路遺構との関連性が生れました。

遺跡調査当時の地図には、道路遺構の上に現存の小路があり興味深いです。出土品は永楽銭が中心のいわゆる「六道銭」で、土壙は室町末〜江戸時代のも、道路遺構は室町末期以前と考えられます。

塚之越塚は、鹿島前道路遺構の位置図右下の字塚之越にあり、中近世のもので113基あります。土壙墓には銭貨・銅・数珠・煙管などの遺物、銭貨は六道銭で、永楽通宝が多いことから十五世紀以降、十六、十七世紀のものと考えられます。中峠共同墓地、長光院にある古石塔は、戦乱が収まりようやく生活に落ち着きを取り戻した江戸時代初期、寛文年間(1661〜70)以降に建てられたものです。



(3) “かまくら道”

① 新木野 海老原宅のタブの木

タブの木は散策コースから少し離れた、郵便局入り口交差点右側にあります。市が指定した保全樹木です。タブの木は海に近いところに多いクスノキ科の常緑高木で、一名イヌグスとも呼びます。指定樹木の中では少ない種です。

② 新木(沖田)の椎の木

新木駅北側には、椎の木の大屋敷林が東西 数百に亘って繁茂し、楡と棕の大樹もあります。最も古い木は幹回り3.9mもあり、高田三郎さんによると明和年間に植えたもので樹齢二百年以上とのこと。駅を出て間もない左手には、田村利幸宅氏神様の御神木(景観スケッチ参照)が見事な枝振りを見せてくれます。屋敷林の西端は、今沖レンタカーさん宅付近で、そのすばらしい大樹林は356線から眺められます。356線北側の幼稚園隣、新木野1丁目の豊島氏宅にも保全樹木の<sup>大樹・楨</sup>があり、その繁みは遠くから目立ちます。

③ 葺不合神社と新木城址 (景観スケッチ参照)

葺不合神社本殿は文化財的価値のある必見の社殿です。祭神は、<sup>鶺鴒</sup>葺草葺

不合尊あへずのみことです。古事記や日本書紀に伝わる山幸彦の神と海神の娘豊玉姫との

間に生れた神で、神武天皇の父に当ります。山幸彦が姫のため海辺に鶺鴒の羽で屋根を葺いた参屋を造ろうとしたところ、葺き終えぬうちに生れたために命名されたと言われます。もと竹内無格社厳島神社の境内で文治二年(1186)に創建され、市杵島比売命 が奉られていました。

本殿前の拝殿は、弁天堂として明和年間(1764~72)に造られ、沖田弁天堂と称され、江戸時代は柏市の布施弁天堂と並ぶ弁天信仰の地でありました。ほかに道祖神、水神社等も見られます。

明治三十年二月に再建されたあと、明治三十九年の合祀令で三峰神社と共に現在の地に合祀されました。大工は新木村の田口末吉、彫刻師は北相馬郡北方(現龍ヶ崎)の後藤藤太郎等と伝えられています(以上、葺不合神社パンフ要旨)。本殿正面扉は弓を携えた神功皇后と平伏する住吉大神の木彫、向拝柱は右柱に亀、左柱に八岐大蛇が彫られています。参道は、いかにも神が鎮座すると思われる大樹森の中を通ります。銀杏(2)は保存樹木です。また神社向いの田口宅屋敷林の櫨も市の保全樹木として指定されている。

新木城は、二つの小さな谷津に囲まれた神社の裏山の畑地、新木字五郎地にあつたとされ、相馬氏の臣荒木三河守胤重が居城しました。元和八年(1622)の則胤覚書によると、相馬則胤は新木の住人で、十四世紀南北朝(鎌倉~室町時代中間期)の戦乱時に宮方・武家方に分かれて戦い、それがために一族は途絶え

と伝えられています。「東国關戦見聞私記」には、三河守配下であった田口内蔵之助の戦記が載っていると云われます。新木の田口家はその後裔です。このような地に古墳時代後半・歴史時代(八世紀後半～十世紀中葉)の五郎地遺跡もあります。

#### ④ 羽黒前館址

羽黒前館址は、縄文・歴史時代包含地の羽黒前遺跡の中にあつて、市内で最大規模の奈良・平安時代の大集落と考えられます。この館址は、手賀沼を望める新木台地の西端にあり、平成五～七年の発掘調査で発見された鎌倉～室町時代の居館址です。調査では、二重の堀跡、堀立柱の建物跡と多数の土壙が発見され、堀に囲まれた方形の館跡であることが判りました。またこの館址周辺からは、墨書土器多数と官人用の腰帯金具7点も出土し、歴史的な遺構の上に構築された建物であることが判りました。現在その一部が遺跡公園になっています。六世紀後半の前方後円墳・羽黒前古墳はこの南西の端にあります。

#### ⑤ 香取神社 (景観スケッチ参照)

神社は大樹林の“鎮守の森”に囲まれていて、“かまくら道”遊歩道出入口の目印になっています。高生垣のある農家、椎の木の大屋敷林、自然景観が温存されている地区で、香取神社の杉(14)は市の保全樹木です。

#### ⑥ “かまくら道”沿いのスケッチ “森の家” (景観スケッチ参照)

#### ⑦ 香取の井戸と椿 (景観スケッチ参照)

遊歩道途中、新木常敷堤東側谷津沿いの道を50m程下ると、民家の脇に一边が3間余りの古い堀井戸があります。香取神社の井戸でありましたが、今は埋没して窪地になっていて水は見えません。周辺に幹周りは約1mもある椿の古木が数本あります。

#### ⑧ 将門の井戸 (景観スケッチ参照)

将門神社に相對する位置にあります。承平二年(932)将門が掘り軍用に供したと伝えられています。中相馬七村毎にあった井戸の一つ、「石井戸」とも言う。近くの東斜面の上には掘込古墳があります。

#### ⑨ 将門神社 (景観スケッチ参照)

将門神社は、手賀沼を眼下見下ろす丘陵にある。隣接地に将門公園緑地がある。北側にある日秀宮前古墳は、古墳時代後期のもので、竪穴式建物7、溝1が確認されています。

#### ⑩ 将門の丘からの手賀沼干拓水田 (景観スケッチ参照)

日秀宮前古墳のあった丘からの風景は広大で素晴らしく、当時の手賀沼は一

面に水を湛えていたものと察します。

⑪ 千間堤(景観スケッチ参照)

千間堤は享保(1755年以降)の新田開発当時の名残。手賀沼を横断して対岸の沼南町布施明神下まで延長千間(1800<sup>尺</sup>)あります。布佐浅間草下からの堤、あるため浅間堤とも言います。築堤に私財を投じた江戸の豪商高田玄清の名をとり高田堤ともいう。しかし完成十年後(1788)、上流農民との水の争いがもとで、洪水時に上流農民によつて千間堤は破壊されたとも伝えられます。

⑫ 日秀西遺跡(相馬郡衙正倉跡 付図・4参照)

県立湖北高等学校敷地にあるこの遺跡は、旧石器時代後期から縄文・弥生・古墳から歴史時代に亘る複合遺跡です。縄文・弥生時代の住居跡10箇所、古墳後期〜奈良〜平安時代の180に及ぶ集落跡と官衙の正倉が発見されています。正倉跡からは当時の貨幣、和銅開珎(銀銭)、瓦、多量の炭化米が発掘され、役所跡と考えられる建物跡から和同開珎の銀銭が発見されたことは、特筆すべきことです。また相馬郡於賦郷に、大初位下の位階を持つ下級武官が存在していたという戸籍記載があります。そのため県下で初めての郡衙遺跡と確認され、全国的にも重要な遺跡となりました。

南端には谷津からの荷揚げ場があったと想定できる人為地形があります。

日秀西遺跡の周辺1.5キロの範囲には、チャミ、野守、君作、兔尻、羽黒前、

大久保、高根、原などの集落遺跡があり、下級官人の居住地と考えられます。

⑬ 諏訪神社

この諏訪神社境内の樹林は正木、樟、モッコク、白樫、藪椿、梅、椎などがあ  
り、それぞれに札がついていて楽しいです。椎(ヌダジイ 9)と白樫(2)は保全樹  
木です。

(4) “かまくら道” 周辺地

① 竜崖城址

当地は、新木団地造成の土取場となったために山はすっかり無くなりました。  
秋田酒店のおかみの話では、店の裏一帯は、かつて東端を頂上とした標高20<sup>尺</sup>  
程の東西に伸びる「りゅうげやま」があつて、周囲の谷津の田や道を見渡せたと  
話してくれました。戦国時代は四方が沼地の小島であつたため、そんな立地を  
選んで竜崖城は造られたと考えられます。水軍拠点であつたかも知れません。  
“かまくら道”は新堀ビジネス専門学校の西側の坂から元気象送信所を横断し  
た後、この竜崖城を西に見ながら江蔵地に向つたようです。

「古戸村十二窓三本足稻荷」に拠れば、城主は栗巻弾正と言ひ、天慶の乱  
(939)の時に守谷城で戦死、留守役の弾正の妻は家宝の龍貝を抱き「蘭沼」に入  
水し落城したと伝えられます。後の城主は、布佐城主とも言われる豊島氏と  
伝えられ、出土品は豊島氏の菩提寺布川来見寺にあります。城跡からは鎌倉



末期元亨二年(1322)の板碑が出土し、昭和四十年頃までは土塁、空堀跡がありました。

また古谷 治\*6 によると、元龜・天正の間に田部主水という人がいて千葉氏に属して威勢を張っていたが、天正十三年(1585)に牛久城主岡見中務、布川城主豊島勢に攻められて落城し、豊島氏に属したとあります。松倉潜蔵は、布佐八景で竜崖山を次のように詠っています。

#### 竜崖夕照

右望刀寧左向山 虬竜蟠屈夕林閑 斜陽未没芙蓉頂 残影移来松樹間

#### ② 气象台記念公園 (付図・4参照)

布佐气象台観測所跡の記念公園です。同観測所は昭和十年以後のわが国の台風警戒前哨線における気象無線網の中心で、中央气象台布佐出張所(気象庁予報部無線通信課気象送信所)と称され、気象観測の歴史に残る施設でありました。園内には縄文時代の北原地東遺跡があります。

#### ③ 君作遺跡・兔尻遺跡・兔尻古墳

当地は、宅地と畑の広がる真栄寺の裏手一帯で、国道356北側にあります。古墳時代後期、奈良〜平安時代の竪穴建物、掘立柱建物多数、溝、特殊土坑も多く出土します。

#### ④ 新木の田口宅高生垣 (景観スケッチ参照)

バス停田口医院から小路を北に入る。真栄寺の北側にある農家三軒の連続する高生垣。第一回景観賞受賞を受賞しました。生垣の木は槿、白櫻、榊の百年を越える古木で幹周りは太く、重厚です。生垣の高さは5mを越え、その総延長は170m、屋敷入口の木は庭木が加わり、奥ゆかしささえ感じます。

#### ⑤ 日秀観音と将門神社周辺の屋敷林帯

観音寺は356号線(成田街道)沿いであり、本尊の観世音菩薩は平将門の守り本尊と伝えられます。日秀観音は成田山新勝寺の開帳日には雨を降らせ、地藏尊は、「成田山などは知りません」と首を振り、「首振り地藏」と呼ばれています。(付図・4参照)

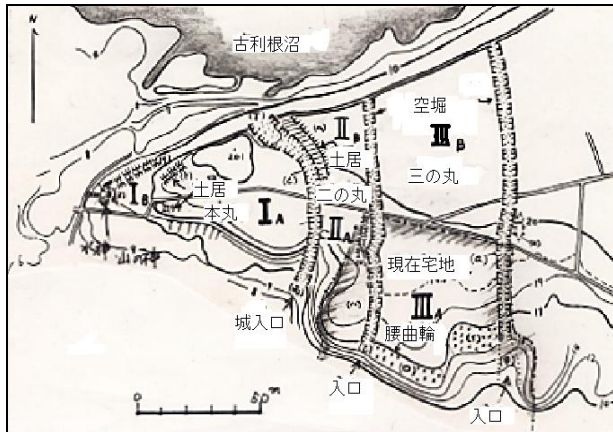
観音寺のイヌ榎、将門神社鎮守の森の榎、スタジイ、日秀の増田宅屋敷林の櫟、高島宅の榎、増田宅のスタジイ、新木の田口宅の、久太夫のかやの木、などの大樹木は、保全樹木で、周辺一帯が緑豊かな樹林帯です。

田口氏宅の栢かの木は樹勢が衰えているが巨木で、幹周り4.8m、樹高約20mもあります。田口久太夫氏は新木城主の配下田口倉之助後裔といわれます。

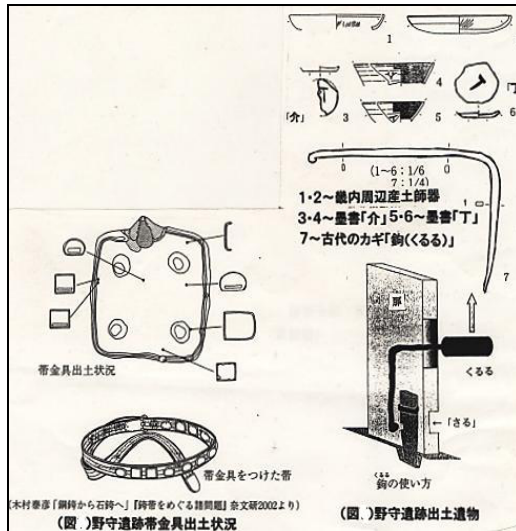
#### ⑥ チアミ遺跡

縄文時代、古墳時代後期の包含地で、奈良〜平安時代の竪穴建物、溝多数と井戸、日秀西遺跡に関連すると見られる官衙関連の遺構があります。

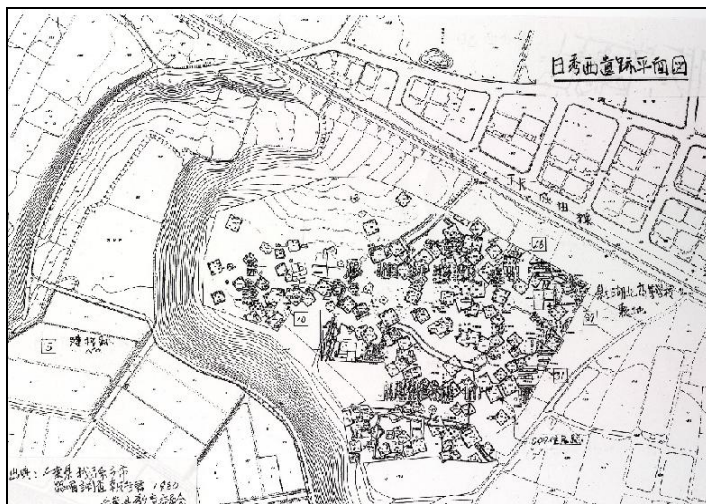
付図・4



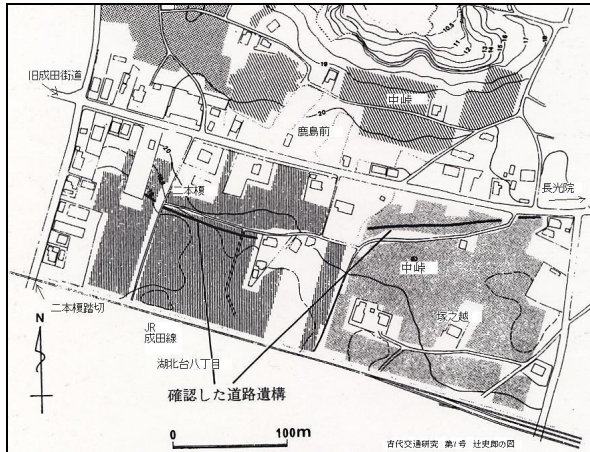
中峠城址図 (\*7)



野守遺跡出土品 (\*8)



日秀西遺跡平面図 (相馬郡衛正倉跡) \*9



鹿島前遺跡発掘調査で確認された道路遺構位置図(\*10)



写真 第3次調査で確認した道路遺構(西より)

道路遺構西側から見た写真 (\*10)



気象台記念公園の元布佐気象観測所(教育委員会提供)



日秀観音の首振り地蔵